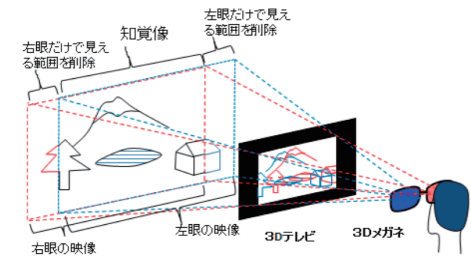


「無視差臨場画像における画枠の効果について」

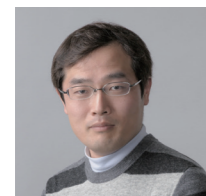
映像学科 名手久貴 Hisaki Nate



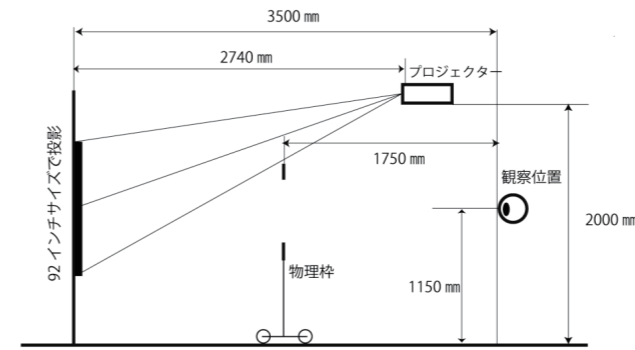
左図のように1枚の画像を片眼に、その画像を水平にシフトさせて片眼に表示させる無視差臨場画像に奥行き感が生じることを著者らの先行研究で示した [1]。本研究では、無視差臨場画像に奥行き感が生じる要因の一つは、スクリーンと画枠の空間であるという仮説を検討した。

実験では、物理枠越しに画像を見る条件（枠有条件）、直接画像を見る条件（枠無条件）、枠有条件の枠と同じ観視距離にするためスクリーンに接近して画像を見る条件（接近条件）を設け、スクリーンと画枠の間に物理的に空間を設けた画像の奥行き感について検討した。提示画像は物体を接写した画像と風景画像を設けた。実験の結果、枠有条件が接近条件よりも奥行き感が有意に高かった。これは、スクリーンと画枠の間の空間が奥行き感に効果をもたらしたことを示唆していた。枠有条件と枠無条件の間に有意な差が見られなかったのは、枠無条件の画像は大画面効果により奥行き感が増したため、両条件間に差が見られなかった可能性があった。風景画像と接写画像の結果に違いは無かった。

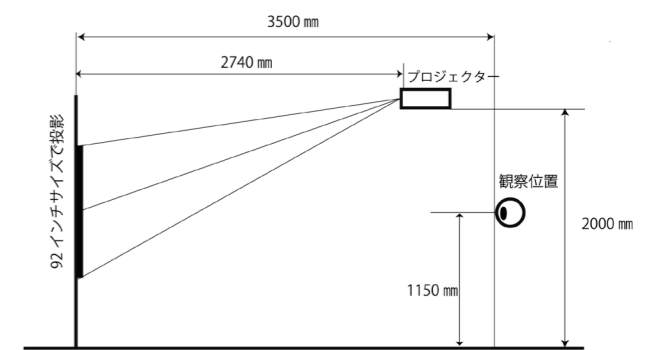
[1] 夏井伸隆, 名手久貴ほか (2015)



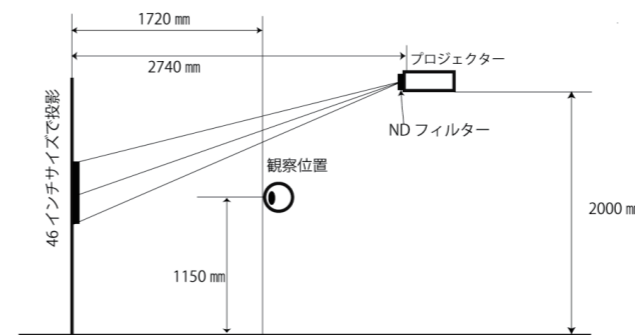
平成 13 年、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程を修了（博士（人間科学））。大学院修了後、通信・放送機構国内招聘研究員、東京農工大学産学官連携研究員を経て東京工芸大学芸術学部映像学科に着任。主に立体映像観察時の視覚疲労について研究を進めてきた。



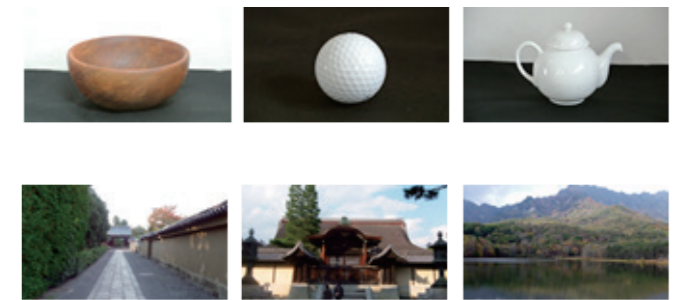
枠有条件の画像提示方法



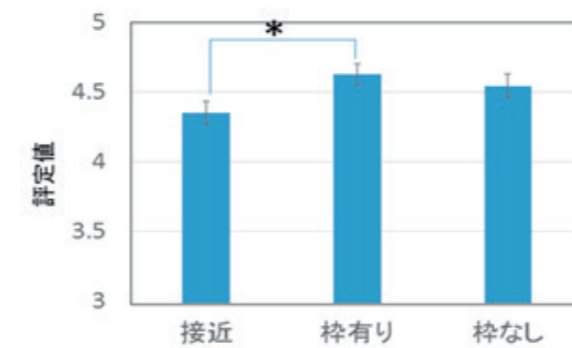
枠無条件の画像提示方法



接近条件の画像提示方法



被験者に提示した画像例



実験結果
縦軸は奥行き感の評定値を示す。